平成２０年１０月２２日
松野　秀計

卓話「大陸横断世界旅行」パート４

旅行期間　　1988 年 7 月 6 日～1988 年 12 月 20 日（168 日間）

・　渡航国　　パート１
中国、モンゴル（トランジット）、ロシア（旧ソ連）、ウクライナ（旧ソ連）（トランジット）、ハンガリー、チェコ（旧チェコスロバキア）、オーストリア、イタリア、バチカンシティー、ギリシャ、セルビアモンテネグロ（旧ユーゴスラビア）、
パート２
ボスニアヘルツェゴビナ（旧ユーゴスラビア）、クロアチア（旧ユーゴスラビア）、スロベニア（旧ユーゴスラビア）リヒテンシュタイン、スイス、ドイツ、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグ
パート３
ドイツ、フランス、モナコ、スペイン、ポルトガル（一部中国）
パート４
イギリス、モロッコ、トルコ、イラン、エジプト。

計　当時 26 カ国、現在 30 カ国

109日目（10月19日）　イタリアのローマで購入した2等列車専用周遊券（ユーレールユースパス）の有効期限があと2日で切れようとしている。
ユーレイルパスとは、イギリス国内全域と、スイスの登山列車を除く、すべての西欧諸国の列車に共通して利用できる周遊券である。2ヶ月間の有効で63，000円。
夜行列車を上手に利用し宿泊費を浮かしながら、各国を旅行するにはとても重宝な代物だ。そんな大事なチケットもあと2日で切れてしまう。切れる前に夜行列車でスペインからフランス、パリへと移動することにした。
スペインという国は、物価も安く、温暖で、人々も陽気で、とても楽しい国だった。
また、マドリードの安宿では日本人バックパッカーが10人近くも集まり、お互いがいままで旅をしてきた情報を交換したり、ばか話で盛り上がったり、一人旅の寂しさをまぎらわしにみんなが集まってきている。
みんなこの安宿で英気を養い、また一人旅へと旅たって行く。
そんな仲間と別れ、名残惜しさいっぱいでマドリードからパリへと、夜行列車に乗り込んだ。

110日目　パリに到着した。有名な都市はどこへ行ってもホテル代は高いし、食事代も高い。同じヨーロッパなのにアルプス山脈の北側と南側では、物価も環境も人間性もぜんぜん違うのは不思議である。
気温や天候は人間そのものに大きな影響をおよぼしていることが非常によくわかる。
　マドリードで仕入れた情報を基に、ソルボンヌ大学周辺で安宿を探すことにした。さすが、貧乏旅行者の生の情報！1泊千円以下の安宿を確保することが出来た。
その情報の補足として、昼食は「ソルボンヌ大学の学食に行ってみると良い」と書いてあったので、早速行ってみることに。値打ちでたくさんの食事にありつけた。
さらにまわりは金髪の素敵な女子大生ばかり。ランチの美味しさが格段に増す！

112日目　パリから列車で1時間ほどで、かの有名な「ベルサイユ宮殿」に到着した。建物、庭園、敷地の全てが美術館である。
宮殿を出て庭を散策していると、急に背中をたたかれた。びっくりして振り返ると一人の日本人男性が立っていた。
彼とは4ヶ月前の6月下旬、北京のロシア大使館（当時はソ連大使館）でソ連のビザを取りに行った際に、書類の記入の仕方がわからず四苦八苦していた旅行者の人であった。これはすごい偶然だ。

115日目　パリに1週間滞在し、ルーブル美術館3回、オルセー美術館2回、近代美術館、モンマルトルの丘、ポンピドー等々有名どころを殆ど制覇した。明日にはロンドンへ行こうと思っている。パリの最終日を記念にエッフェル塔からパリの夜景をみることにした。夕方、セーヌ川のほとりを歩いきエッフェル塔に向かった。日本や香港で見る夜景と違い、パリの夜景は広告塔やネオンがなく、光がとてもシンプルである。
凱旋門を中心に放射線状に広がる道路に車のテールランプが光っているのが、すごくお洒落に感じる。
しかしパリという街は、表面上はとてもお洒落な街だが、実際はひどいもんである。
かの有名なシャンゼリゼ通りも、犬の糞だらけで、下を見て歩いていないと必ずといっていいほど犬の糞を踏むことになる。
道路脇や公園など紙袋等のゴミがそこらじゅうに捨ててあるし、とても驚いたのはスレンダーで素敵なお姉さんが歩行中、普通にタンを吐く姿は、中国人となんら変わらない。さすがに中国と違って手鼻をかんだりはしないが、どちらにしても、街中が汚くイメージしていた素敵なパリとはかけ離れた光景であった。

118日目　今日から11月。イギリスに来て3日目になるが、天気はずっと快晴。
冬のイギリスのイメージはドーンとよどんだ曇り空をイメージしていたが、全然違っていた。

しかし、この快晴な天候とは裏腹にイギリスの人達の表情は、イメージ通りで、とても暗く陰気な雰囲気を漂わせている。出勤時の日本のサラリーマンの表情と似ているらしい。
　朝6時。まだ夜明け前であたりが真っ暗の中、ミュージカルのチケット売り場に到着。9時から発売される当日券を購入する為、約3時間並ぶことにした。
３日前、ユースホステルで知り合った日本人旅行者のすすめで、昨日一緒にミュージカル「キャッツ」を見に行った。
日本でも有名なミュージカルだったので名前は知っていたが、実際に見てみると
ものすごく感動した。言葉はすべて英語なので何を言っているのかわからないが
体全体で表現する演技は言葉がわからなくても、すべてが伝わってくる。
いっぺんにミュージカルの虜にさせられてしまった。
今日は「オペラ座の怪人」を見るためにならんでいる。窓口で買う当日券は非常
に穴場で、すごく良いチケットが手に入る。昨日のキャッツは右サイドの2列目。
今日は中央の前から5列目。日本だったら絶対に手に入らないような良い席が簡単に手に入る。
明日は「レ・ミゼラブル」、明後日は「スターライトエクスプレス」を見に行こうと思う。

119日目　夜の22時、「レ・ミゼラブル」を見終わり、感動の中、地下鉄でユースホステルへ帰った。2階の自分のベッドルーム行くとそこには見知らぬ外国人が寝ているではないか！その外国人に「ここは俺のベッドだ」っと言っても言葉が通じず、全然らちが開かない。フロントにクレームを言いにいくと、「お前はもう3日過ぎたからここには泊まることができない」といわれた。イギリスのユースホステルのルールは同じホテルには最長3泊4日までしか泊まることができないらしい。「どうしてもっと早く教えてくれないのか」と怒ったが、「お前がいなかったから」と・・・。確かに今日も当日券を買う為に朝6時前にホテルを出て、その後は大英博物館、夜はミュージカル。
朝からいままで一度もホテルに戻っていなかった。当然ホテルは満室で空いてる
ベッドはない。更に12時には門限となるり、12時を過ぎると部外者はホテルから
出て行かなければならない。11月過ぎのイギリスは半端になく寒い。零下5度以下である。12時ぎりぎりまでホテルで粘り、荷物を背負って極寒の街へ出た。
30分程経つと体が冷え込んできたので、体を温めようと公園の遊歩道を歩くことにした。1時間ほど歩くと体が温まり汗が出てきたが、10分後これは逆効果だということに気づく。しばらくすると汗が冷え一段と体は寒くなる。体力も消耗し、お腹も減る。
こういうときは、やはりじっとしているのが一番である。からっ風の通らない建物の影で、拾ってきたダンボールを床に敷き、新聞紙は体に巻き、持っている服すべて重ね着をし寝袋で寝ることに。窮屈ではあったが意外と寒くなく、朝までぐっすり熟睡することが出来た。たいしたもんだ！

122日目　昨日アフリカのモロッコの首都ラバトに到着した。
ロンドンからの飛行機で隣に座ったモロッコ人と仲良くなり、自宅にまで招待された。ホイホイついて行くのもちょっと危険かと思ったが、飛行機の中で知り合った人だし、日本にも仕事で1年ほど住んでいて、今はロンドンの日本食レストランの店長をしている人なので、お言葉に甘えて泊めてもらうことにした。夜の食事にはベネジさんの兄弟やいとこが集まり盛大なパーティとなった。中国でも、ドイツでも、イタリアでも自宅へ招待されると、すぐにホームパーティとなる。この感覚は日本では考えられないが、将来はこんなおおらかな感覚を持ってすごせたらいいなあと思う。

124日目　ベネジさんが自家用車でわざわざマラケシュまで送ってくれた。
片道5時間もかかるのに本当に申し訳ない。
マラケシュの中央広場にはいかにもアフリカらしく無造作に店が並び、いろんな商品が売られていた。金や銀の製品や、じゅうたん、香辛料、バザールにはお決まりの蛇使いの人も・・・。TVの「なるほどザ・ワールド」で見た光景そのものが目の前に広がっている。

126日目　サハラ砂漠のはじまりが見れるというフェズの街にバスで行くことにした。
中国では当たり前であったオンボロのボンネットバスに乗り、殆ど舗装がされていない道を10時間かけて移動する。移動の途中、昨日、冬のこの時期には非常に珍しく降った雨によって急に100mほどの大河ができ、通行止めになってしまった。乗客のみんなは、こんなことは日常茶飯事といった感じで各々バスから降りて木陰で休憩をとったり、昼寝をしたり、のんびりしている。
3時間ほどすぎ、水幅が半分ほどに減ってきたところでバスのドライバーが出発すると声を張り上げていた。どうやらこの水の中を強行突破するらしい。
ここまで待ったんだからもう少し水が引くまで我慢して待てばいいのに。
ゆっくりと水の中をバスが進んでいく。もともと舗装がされていない土の道路に水が付いたらどうなるか想像すれば簡単にわかる。案の定3分の2ほど進んだところでぬかるみにタイヤが取られ、立ち往生した。更にバスが止まったところでマフラーから水が入りエンジンまでストップしてしまった。乗客全員がバスを降り、ずぶぬれになりながらバスを押す羽目になってしまった。
当然、バスが壊れてしまった為、その日の夜は荒野の真ん中で野宿することが決定した。あの極寒のイギリスのことを考えれば暖かいところでの野宿は全然大丈夫だ。それより一切明かりがない澄み切った夜の星空はいままで見たことがないほど感動をした。日本では流れ星を殆ど見たことがないが、流れ星は5分おきくらいに流れていることが初めてわかった。